

東南アジアの森と野と海

高 谷 好 一*

Forest, Sea and Farm Land in Southeast Asia

Yoshikazu TAKAYA*

Forest, sea and farm land in Southeast Asia are discussed from social, cultural, economic and dynamic points of view. The forest was very rich in commercial products like scented wood, but harbored endemic diseases as well. The sea of Southeast Asia provided people with easy access to the forest. Southeast Asia thus became a busy center for extraction of forest products. Many adventurers who came to the area, however, perished under the disease ridden conditions. Deep forest was regarded as the domain of spirits and gods. Cultivation was neglected in traditional land use due to the too vigorous growth of the forest, but has started to expand in the last several decades.

はじめに

東南アジアの核心部は森と海の世界である。地理的にいって森と海の面積が広いというだけでなく、森と海が生業や社会、人の考え方などを支配している。この小論ではそのあたりのことを記述したい。もっとも東南アジアには野もある。だからより律儀に記載しようとする、森と野と海の三つをカバーしなければならない。

I 東南アジアの森

帯状構造

世界中どこでもそうだろうが、東南アジアでも決して単質な森がその全域を覆っているのではない。それは海岸線から山稜にかけて帯状の変化を見せる。最も標準的なものは海岸から、マングローブ、湿地林、熱帯多雨林、山地多雨林といった変化の様相を見せる。

マングローブは潮間帯にある。その背後にあって、潮汐は侵入しないが、低平さの故にいつも湛水しているような所に発達するのが湿地林である。そして、さらに内陸に入り、傾斜が現れて排水がよくなった所に現れるのが、熱帯多雨林である。ここは植物の生育には最も適した所で、何万種という樹種がお互いに競い合いながら、最も豊かな森を作っている。やがてさら

* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

に、内陸に進み、標高が 700～800 m にも達すると気温が降下してくる。こうなると森は温帯のそれのように種類を減じ、また樹高も低くなってくる。これが山地多雨林である。(森林専門家の間では、山地多雨林の下限は標高 1,000 m ぐらいとされているが、土地利用を議論する時は、ここに示したようにもう少し低くした方が都合がよい。山田勇, 1991『熱帯多雨林世界』参照。)

熱帯多雨林

マングローブは海岸線沿いにきわめて狭い幅でしか発達しない。その背後の湿地林もふつうはそれほど幅広くは発達しない。山地多雨林の面積もあまり広くない。だから、面積的にいうと熱帯多雨林が圧倒的に広い範囲を占めることになる。東南アジア、とりわけ島嶼部東南アジアは熱帯多雨林地帯だといっても過言ではない。

この熱帯多雨林は生物学的にはきわめて豊かな森である。しかし、この豊かさは人間に対しては次のような性質をもって立ち現れている。まず第一はここは森林物産の宝庫である。その何万種という樹種の中には香木がある。沈香や龍脳はその代表である。梅檀のある森もある。東インドネシアだと、丁子やニクスクを出す森がある。その他に各種の樹脂やゴム類、それに蜂蜜、蜜蠟などが到る所にある。熱帯多雨林はこうして人間にとってはきわめて魅力的な所なのである。

しかし、この同じ熱帯多雨林は人の接近を許さない。瘴癘の地だからである。熱帯多雨林に入ると人は熱病にかかっても簡単に死ぬ。だから、昔は、熱帯多雨林には瘴気が漂っているといつて、人々は森を恐れた。マラリア蚊や、ツツガ虫がいて病気をうつしたのである。この年中多湿な森には、そのほかにもありとあらゆる病原菌が充満している。不用意に熱帯多雨林に入ると、そういう病原菌にやられて死んでしまうのである。

それにもうひとつ悪いことは、この熱帯多雨林は食料にしうるものがほとんどないということである。これは異様に聞こえるかも知れないが、事実である。熱帯だから野生イモ類が多いだろうと想像するかもしれないが、そうではない。確かにイモ類は多いのだが、根にデンプンを貯めるイモはない。通年高温湿潤な熱帯多雨林では、寒冷季や乾燥季がなく、したがってエネルギー貯蔵の必要がないからイモはデンプンを貯めないのである。熱帯多雨林で人間が食料にしうるものと言えば、僅かに、ヤシや籐やシダの新芽ぐらいのものである。これでは十分に食料を確保しようというわけにはゆかない。

熱帯多雨林はかくして、きわめて魅力的な宝庫ではあるが、そこへ侵入することはきわめて危険な場として存在しているのである。

マングローブと山地多雨林

それでは人間はこの東南アジアではどこにも住めないのかというと、そうではない。住める所は二カ所ある。ひとつはマングローブの前面であり、いま一つは山地多雨林である。

マングローブ前面というのは、マングローブのさらに先の海のことである。そこは普通は遠浅になっていて、結構よい住み場所になる。こんな所だから、長い杭を用いて海中に高床家屋を建て、住むのである。

ここが良好な居住地であるというのは、まず何よりもこの衛生環境の良好さによる。マングローブ林の中だと、蚊がきわめて多い。だが、一步海面上まで出てしまうと蚊は一挙になくなる。そこはマングローブの日陰と違って燦々と陽が照っているし、海風が吹いている。こういう所には蚊はいないのである。危険な病原菌もない。

マングローブ前面の遠浅地帯はまた食料になるものが多い。エビが非常に多いし、カニや貝も多い。こうしたものを多用するがぎり、ここでは食料には事欠かないのである。

海中に杭上家屋を建てて住むということは私たちのように陸に馴れ親しんだ者には大変なことのように思えるかもしれないが、実際にやってみるとそれほど大したことではない。もちろん舟が足がわりである。大変などころか、むしろ快適ですらある。

山地多雨林が今一つの居住可能地だということは、その気候が既に温帯的であり、病原菌の活動が低下しているからである。ここはしかし、食料確保という意味ではそれほど楽観を許さない。食料は耕作によって確保しなければならない。しかし、とにかく病原菌という大敵の少ないことはきわめて大きな利点である。そこに踏みとどまって耕作をすることが可能になるわけだからである。

こうして見てみると、東南アジアにおいては居住可能な地域は巨大な熱帯多雨林を避けた二つの縁辺部だということになる。

熱帯多雨林と汎神論

熱帯多雨林は人を近づけない宝の山である。これが第一の特徴だが、もうひとつ大きな特徴がある。それはここが勝れて汎神論的な世界であるということである。これは熱帯多雨林の性格というよりも常緑林に共通した特性なのだが、次のようなことである。

常緑林の中は暗い。そんな暗がりの中に大小の樹幹が突っ立っていて、不気味である。そんなところで最初に覚えるものは恐怖である。その暗がりの樹幹の背後に何か潜んでいるのじゃなからうかと不安になる。そのうちに垂れ下がった蔓や曲がった幹が化け物のように見えてくる。

そんな時、私たちは、どうか魔物よ悪さをしないでくれ、自分は何も悪いことをしていないのだから、と身をこわばらせ、どうかカミサマ私を守ってくださいと必死で祈る。これはすで

に汎神論の世界そのものである。森が暗ければ暗いほど、より私たちはそれを強烈に感ずる。暗い常緑林はそういう所なのである。

こういう森の中では自分という存在はまた極めて小さいものだと思わせられてしまう。何せ闇の中から不意に出てくるかも知れない力は、自分の能力などでは全く対処の仕様もないような巨大なものである。異質なものである。こうした森の中で生きる人が持つ人間観というのは、だから、人間は万物の霊長だ、人間万歳などというものとは全く違う。むしろ自分は無に近い小さい存在で、かろうじて宇宙の中に生かしてもらっているのだ、といった感じである。

ところで、こうした闇から一步林外へ出ると、そこにはパッと全く別の世界が展開する。太陽の照りつける林辺では緑の葉がキラキラと輝いている。花が咲いている。蝶や蜜蜂が飛び交い、蟻達が忙しげに動き回っている。そんなものを見た時、私たちは、おお、君達！とあって、声をかけたくなる。彼らと生の喜びを分かち合いたくなるのである。闇から帰還したばかりの自分はそのとき、この緑の葉や花や虫達と同じくらいに、心がつつましくなっていて、彼らに同類意識を覚えるのである。この時、私たちは草木虫魚と共に生きていくといってもよい。

常緑林というのは人々をしてこういう体験をさせる所なのである。熱帯多雨林では、このことが最も純粹に、そしてもっと頻繁に起こっている。

熱帯多雨林とは人々をして、いたる所にカミガミを感じさせ、草木虫魚との共生を実感させる所なのである。

II 東南アジアの野

ここで野といっているのはそこで農業が行われる開けた空間のことである。ふつうは落ちついた農村があり、そのまわりには農地が開けている。日本の盆地や谷筋は典型的な野の空間である。

山地多雨林の野

先に述べた森林の帯状分布から見ると、東南アジアの森林帯で、まともに陸上で住めるのは山地多雨林地帯だけということになる。実際、山地多雨林帯にだけは、ちゃんとした居住があり、農業の確立していることが多い。主だった実例を拾いあげて見ると、次のようなものがある。

まず、スマトラのバタック地帯。ここでは巨大な伝統家屋が軒を連ねて集落を作り、焼畑に加えて、いわゆる蹄耕による水稲耕作や、インド系の犁を用いた水稲耕作がある。一部の所では、インド渡来と思われる条播機使用の畑稲作もある。要するにそれぞれの条件に応じて多様な技法がちゃんと確立している。同じスマトラ高地のミナンカバウもバタックに似たような豪

華な家屋とよく発達した稲作を持っている。スラウェシのトラジャはこれまた著名な山地多雨林の居住者である。トンコナンと呼ばれる伝統家屋は、その厚くて重々しい屋根と丹念に彫り込んだ壁や柱の彫刻が素晴らしい。ここの人達がまたよく完成した稲作技術を持っている。彼等は、蹄耕稲作をするのだが、その他にペレコ（巨大なヘラ状の耕起具）やルイサン（土運び兼地ならし用の櫛）といった極めて特異な農具を駆使して水稲耕作を行なっている。この特殊な農具はここ以外ではその類縁を見出せない。多分、この高地で独自に発明され完成させたものである。ロンボクの1,000 mを超す高地でも同じように完成度の高い稲作が存在している。東南アジアの山地多雨林帯でのよく発達した農業展開は枚挙にいとまがない。

こうした山地多雨林の農業に特徴的なことは、いずれもそれが相当強く、それぞれの地点で特殊展開したものだということである。古くに山頂近くに登りつめて、行き場を失った技術がそこで一種のインボリューションを起こしているのである。

山地多雨林帯の野はこうした極めて興味深い農業の諸相を見せている。ただ、いかんせん、その面積となると、極めて微小なものになってしまっており、広い東南アジアの中ではほんの局部的現象という恰好になってしまっているのである。

熱帯多雨林の焼畑

先に熱帯多雨林はその瘴癘性の故に人間は居住しえなかったと書いた。しかし、より正確にいうと、それは基本的にはそうだとすることであって、例外的な場所もないではない。熱帯多雨林でも高位のものや、尾根筋で風通しの良い所には古くから人間は侵入し、耕作を行なってきた。

ただ、そこでの耕作は山地多雨林の場合のような定着的、恒久的なものではなくて、移動的な焼畑であった。熱帯多雨林帯の農業が移動的な耕作になったことには理由がある。それは水稲耕作を行えなかったからである。水稲耕作を行おうとすると、ただでさえ不健康な熱帯多雨林地帯で、一段と危険な谷筋や凹地に降りなければならない。さすがにそこまでは人々はよくなしえなかったのである。

尾根筋での耕作になると、これはもう焼畑にならざるをえない。この植物の旺盛に繁茂する条件の下では、湛水下での雑草の除去を行わない限り、雑草対策の方法はただひとつ焼畑でしかありえない。森を焼き、耕作は1年だけで止めて、また新しい森を焼き、かくして、雑草の侵入を防止するというのが、唯一可能な方法である。

熱帯多雨林でもその一部ではこうして耕作をやっている。しかし、こうした焼畑の行われる所を本当に野としてよいのだろうか。これは問題である。こうした所では、景観的には圧倒的な大部分が森である。そして、耕地はその中にまるでケン粒のようにポツンポツンとあるだけである。

さらに加えて、その耕地がこれまた切株の無数に残る、およそ耕地らしからぬ耕地である。焼畑ではふつう腰の高さぐらいの所で樹木を伐りたおしてゆく。これは伐開作業を仕易くするためである。それと同時にこうしておくで切株からはいち早く萌芽がでて、森林の回復を早める。だからこうするのである。要するに焼畑では、本来そこは耕地を含めて全体が森なのである。ただ、耕種をする区画だけは、その1年に限って地上部を伐り倒し、日当たりをよくして、まだ十分に生きている切り株の間で作物を作るというのである。焼畑とはいってみれば、森の中で、森を破損しないような方法を用いて行なっている極めて特殊な耕作なのである。

こんな耕作法、こんな景観の所を野ということはやっぱり出来ない。熱帯多雨林には焼畑耕作はあるけれど、野はない。

例外的な低位の野

東南アジアの大部分は熱帯多雨林で覆われていてそこには野はない。野は熱帯多雨林の上に突き出た高冷な山地多雨林にほんの小さいものが局所的に存在するだけである。これが東南アジアの基本的な構図である、と言ってもまず間違いはない。但しこの基本的な構図を破る例外が東南アジアには3カ所ある。

第一の例外はジャワとバリの二つの島である。この両島は赤道直下にありながら、まわりの島々とは全く違って、広く野が開けている。それは稲とトウモロコシとキャッサバを広く作る野である。何故ここがこんなに広大な野を持つようになったかという、理由は二つある。最も大きな理由は、ここが周辺の地域に比較して寡雨で健康上好環境をもっていたからである。オーストラリアの島陰に位置したこの両島は、こういう好条件に恵まれていたのである。

もっとも、こうした好条件にもかかわらず、島民達はなおかつ多大な犠牲を払ってここを野に変えたのである。この島が多大な犠牲を払ってでもなお野を開いたということには理由がある。それが第二の理由である。それはまわりの熱帯多雨林の森林物産搬出をねらった冒険者達が多大な犠牲をも顧みず、この二島の積み出し基地化を計ったからである。ポロブドゥルやプランバナンという巨大寺院遺跡があるが、これらは今から1000年以上昔に、インドの冒険者達が建設した戦略的基地である。彼らは当時にしては世界最大級の物量を投じて、この一大事業を行なった。

私のいいたいことは、次のようなことである。ジャワ、バリの両島はいわゆる農民の拓いた野ではないということである。当時何か大きな世界史的な動きがあって、この多島海世界に大挙して流入してきた外部勢力があり、その人達が拓いた野であるに違いないということである。それは森林物産交易を含めて、多島海外交史といったものに関係している。ジャワとバリは今日でも熱帯多雨林が覆い尽くす東南アジア島嶼部の中でまるで宝石のようにそこだけキラリと輝いているが、それはその根底に、多分、上述のような歴史があるからである。

第二の例外はイラワジやチャオプラヤやメコンのデルタである。そこは今では一望千里の水田になっている。だがこれはある意味では人を惑わす野である。これらのデルタの水田地帯はいずれも19世紀の後半になって初めて出現したものである。それまでは河口の湿原で雨期には大湛水し、乾季には干上がってしまうどうしようもない土地でしかなかった。およそ人間の居住域とは考えられていなかった土地なのである。それが19世紀後半、植民地経済の進展に伴って、一挙に干拓、農地化されたものである。干拓は巨大資本の投下があって爆発的な勢いで進められた。そして、そこには外国に売るための米が全面に作られた。いわばこれは植民地経済の落し子である米プランテーションなのである。伝統的な東南アジアの土地利用を考える時、このデルタの水田地帯は一応無いものとして取り扱った方が東南アジア像はより正しく把握しうるのだろう。

第三の例外は大陸部東南アジアの中央部に位置するいわゆる平原である。上ビルマや東北タイなどがこれの典型例である。ここでは極めて古くからインド系の稲作が行われていた。その景観も特異なら稲作技法も特異である。景観はインドのそれに似た半乾燥の広大な無樹地帯である。そこを何回も牛で犁耕したうえに稲粃が散播される。稲刈が終わると、大きな牛車を田の中に引き入れて刈り取った稲を運び出す。稲は特別に仕立てられた脱穀場に運ばれ、そこで多数の牛に踏ませて脱穀される。いわゆる牛蹄脱穀である。全ての作業は完全にインド式のものである。こうした風景、こうした農業は今までに議論して来た森と海という枠では全くどうにも解釈しえない。これこそいってみれば正真正銘の野なのである。

さて、こういう三つの例外を数え上げたところで私は改めて東南アジアの構成を考えてみたいのである。内陸平原の野はあまりにも典型的なそしてあまりにも巨大なものである。したがってこれは森と海の世界から切り離してしまった方が話がスッキリする。結局、東南アジアはそれを二分したら、描写もし易いし構造もはっきりするのである。だから思い切って二分しようではないかというのが私の提案である。こういうふうな視点で二分すると大陸平原部が一つの地域を構成し、それ以外の所、すなわちいわゆる東南アジア島嶼部と東南アジア大陸部の海岸地帯が今一つの地域を構成するということになる。

もし、海域東南アジアという言葉を経理学的な意味で用いるとするなら、その範囲はここで二分した後者の範囲に用いたら如何なものだろうか。こういうことだとすると海域東南アジア世界は勝れて森と海の世界ということになる。そこで唯一の例外はキラリと宝石の如く輝いているジャワとバリだけである。海域東南アジア世界というのは圧倒的な森と海の世界だが、キラリと光るジャワとバリをその中に抱えている。それはいってみれば結晶化した小さな、しかし強力な野である。東南アジア海域世界は構造的にはこういうものなのである。

Ⅲ 東南アジアの海

異人の港

19世紀の中頃まで東南アジアの海域世界には実に多くの港があった。そして、それらの港は多くは異人たちによって経営されるものであった。

考古資料や漢籍によると初期の東南アジアの港はそのほとんどがインド風の文物で覆われていた。本当にインド人が港を経営していたのか、あるいはインド文化を受容した他の人達が経営していたのかは定かでないが、とにかくインドそのもののコピーがそこにあるのである。

最も古い時代の港だったと思われる所からは碑文が出るが、それはサンスクリットで書かれている。6, 7世紀になると漢籍に港の記載が現れるようになるが、そこにはインド文化の氾濫が生き生きと描かれている。港の王はインド風の名前を持ち、インド風の身なりをし、まわりには多数のパラモン僧を侍らせている。ある港ではヨーグルトのようなインド風の乳製品が盛んに食べられていた。

この状況は時代が進むと少しずつ在地化の傾向を見せるようであるが、完全に消え去るということにはなかった。そして、イスラーム商人達の到来が盛んになると、今度は一挙にイスラーム商人の港が増えた。モスクとスルタンの宮殿が建てられ、アラビア語やペルシャ語を話す商人達が港に溢れるようになった。もっともこの変化はイスラームがインド商人を追い出した、といったふうなものではなかったらしい。むしろ当時世界の経済が大膨張して、イスラーム達は、その波に乗り新しい所に新しい港をどんどん作っていったようである。このことは13世紀頃から始まり、15, 16世紀頃にはもっと拡大したらしい。

東南アジア海域世界では異人が港を作る、異人が政治権力を作る、ということはよほど一般的なことであったらしい。海域東南アジア世界の多くの地方の建国神話を見てみると、ほとんどの所で異人が王国開闢の祖になっている。

カンボジアの建国神話では土地の女酋柳葉がインドからやって来た混滇と結婚し、その子がカンボジアの国を始めたことになっている。スンダ海周辺のマレー世界には広く別の建国神話がある。ある時山の頂が光輝いているのでそこに行ってみると、三人の貴公子がいて、我等こそはアレクサンダー大王の末裔であるといった。それでその貴公子を戴いて王としたというのである。マレー世界の建国神話にはいろいろのバージョンがあるが、いずれも話の筋はアレクサンダー大王の末裔を引き出してくるのである。王が実際にその血からして完全な外国人であるかどうかは別として、このように王たる者には遠来の貴種であるということが要求されているのである。

港王国の実態

伝統的な東南アジアの海域世界にはいくつもの国があった。そしてそれらは異人の王を戴いて森林物産の搬出を行っていた。ところで、これらの王国というものは、私たち日本人が普通に考える王国とはずいぶんと性格の違うものであったらしい。それはまず領域支配をしていなかった。それに王国経営の中心は決して王だけではなかったらしい。むしろ出自を異にする複数の人たちが契約によって王のまわりに集まり、その契約通りに任務を分担し、港市王国ともいべきものを経営していたらしいのである。

18世紀から19世紀にかけてはスマトラの東岸にシアクという強大な王国があったが、その場合だとその様子は次のようであった。

まず第一に領域であるが、シアク王国の公称の領土はスマトラの約半分を占めるもので、その長さは南北 7~800 km に及んでいた。しかし、これは属国を含めた範囲で、実際にシアク王国が直接的な支配を行っていたのはシアク川という一本の川筋だけであった。シアク川と同じような川がこの王国には何本もあって、それぞれの川筋には別の小王達があり、彼らはほぼ完全な独立を保っていた。ただ時々シアクに献納をし、戦の時には兵を出したりしただけである。こんなわけで、海域東南アジア世界では巨大な王国といっても、実際には直接の支配域はそのうちの特定の川筋一本だけで、その他はいわば別の王の支配範囲だったのである。

さらにまた直接支配地のその一本の川筋自体が極めて奇妙な構造をもっている。シアク川の場合だと川筋の住人の圧倒的多数がミナンカバウである。彼らは自分達の首長を戴いて住んでいる。その川筋の河口から 70 km ほどの所にシアクスリンドラプラというこの国最大の港があって、王宮はここにあるのだが、この港町の人口の9割方までがミナンカバウなのである。ちなみに王はというとこれははっきりしたところ、何国人か判らない。ただミナンカバウでないことだけは確かである。言ってみれば他国者のこの王が、ごくごく少数の手下をつれてこの王宮に住んでいるのである。その住み方は他国者の王が、ごく少数の手勢と共にミナンカバウの首長の客人となってここに住んでいるといったようなそんな恰好になっている。

さらに今ひとつ奇妙なことは、この川の河口にはまた、全く違う一群の人が住んでいる。これは人種的にはブギスだともマレーだともいわれるが、この人達が川口の警護を固めている。いわゆるお雇い外人の海の強者達である。ブギスといえば、ここからは 1,600 km 以上も離れた島の民族である。

シアク王国の行政組織ははっきりしている。そこでは王が頂点に立ち、その下に4人の大臣がい、この5名が言ってみれば内閣を作っている。4人の大臣というのは主席の海軍大臣を筆頭に財務大臣と二人の国務大臣である。ここで、国務大臣などは王の係累の人だが、主席の海軍大臣は例の川口を固める傭兵隊長のブギス人である。

以上が政府の中枢にいる人たちで、同時に実質的な王国経営者である。しかし、地元のミナ

ンカバウの首長も員外メンバーとして実際には経営に参加し、それ相当の特権を持っていた。その特権の大きさは海軍大臣と同じ程度であったという。

大臣達は王から給与を貰って働くというようなものではなかった。各自が一つの業務を分掌し、それに応じて自分の取り分を得ていたのである。だから、全体の成り立ちは全く合名会社のようなものであったわけである。

今一度、個人ごとにその分担業務を整理してみると、それは次のような具合であったということになる。

まずこの川筋をその住民を含めて実質的に支配しているのはミナンカバウの首長である。彼はこういう立場のために住民を使役して森林物産を採集、集荷させることが可能である。こうして集められた物産を今度は王が販売する。この他国者の王は実際には海外市場へのチャンネルをもった商売人であるから、これは可能である。彼はその一味の中にしばしばアラビア人などをつれてきた。また王自身がアラビア人などであったこともある。王はしかし、たんに異国から来た商売人というだけではない。非常にしばしば、いやほとんど例外なく、異国から来た貴人ということになる。しばしば先に述べたアレキサンダーの子孫にさせられるのである。そして首長の娘をめとったりする。現にシアク王国の年代記もその王はアレキサンダーの子孫だということになっている。そして最後に名だたる海の強者が船と兵士を揃え、王と契約を結んでお雇い海軍大臣として川口で守りを固めているのである。

興亡常なき王国群

商人王たちは熱帯多雨林が持つ高価な森林物産を求めて、はるばる遠方からやって来た冒険者達である。先に述べたように熱帯多雨林に近づくことは危険きわまりないことである。多くの冒険者達はバタバタと死んでいった。それでも彼らは儲けに惹かれて次から次へとやって来た。そして彼らの誘いに惹かれて首長達も川筋に住み搬出作業を大々的にやるようになった。

こうして出来た港国家は多くは浮き沈みが激しく、興亡常なきものであった。港王国の不安定を導いていた理由はいくつもあるが、第一はこの地が先に述べたように瘴癘地であり、食料補給もままならないような所であったからである。病気に打ちひしがれ、人々が離散し、港のつぶれることもよくあった。第二に資源の涸渇もあった。その流域の森林物産が採れなくなると、別の川筋に港を移すことになった。さらにその経営者の組織が解体することもあった。港経営は先に見たように三者の契約で成り立っていたのだから、利害の調整がつかなくなった時には協業は解消された。また、隣接港間の争いということもないではなかった。すでに見たように王国というのも、その実態はドングリの背較べで、それらの小王達の連合であったのである。こうして、港の恒常的成長に関する不安定材料はいっぱいあったわけである。

東南アジア海域世界というのはこういう状況でずっと存在してきたのだと考えておけばよ

い。そこには突出した巨大勢力もなければ、また一つの勢力が安定して長期に存続するということもなかった。むしろ、無数といってよいほど多数にある港勢力が、お互いに浮き沈みしつつ、しかし、全体としては領外への販売に便利なある種の整理されたネットワークを作って存在し続けてきたのである。

こうした状況はおそらく遅くとも5～6世紀には出現しており、それが大々的に広がり出すのはイスラーム経済がこの海域に広がり出してくる13世紀頃からののであろう。そしてこれはオランダやイギリスが本格的な植民地支配を貫徹する19世紀中頃までは続いたのであろう。

汀線の集落

ここで汀線の集落としているのは王のいる積み出し港ではなく、もっと小さい普通の集落という意味である。厳格な意味で汀線だけにあるわけではなく、大小の河川の川岸などにあることもある。私が自分で調べた集落だと次のような具合である。

それはスマトラの東海岸にある。岸をべったりと覆うマングローブの前面から 200 m ほど離れてあるから、まさにマラッカ海峡そのものの中にあるわけである。175戸が塊状をなして杭上家屋群を作っていた。

この175戸は一塊を成すのだが、実際には3区からなっている。130戸がマレー人区といわれていてこれが早くからあった中核である。後にこれに15戸の福建区というのがくっついた。福建出身のインドネシア人漁民ということである。そして、最後に約30戸のオランラウト人の家がさらに付け加えられた。最後のものはオランラウト定着政策に則って政府の建てた居住区である。このように、この海上集落は混住集落である。さらに詳しくいうと、例のマレー人区のマレーというものの内容がまた極めて混合的なようである。いろいろの地方出身者が混住している。要するに、集落は出自を異にする人達の文字通りの寄り合い世帯なのである。

さて、この人達が何で食っているのかということ、それがどうもはっきりしない。はっきりしていることはいくつかある。しかし、全体像がつかめないのである。はっきりしていることはまず第一は福建漁民というのは漁業で生きているということである。大きな網を持っていて専門的に漁業を行なっている。第二にオランラウトというのはつい2、3年前までは舟住みの漂海民だった。季節的に移動して森林産物採集や小規模な漁業などをしていた。

こういう意味でよく判らないのが中核にいるマレー人達の生活なのである。ここでもいくつかの事実は確実にある。まず第一はマングローブの背後にココヤシ園を拓いて、ココヤシ栽培をしている。ごく一部は建材や炭原料としてのマングローブの伐り出しをしている。福建漁民の漁業の手助けをしている者もいる。それにどうやら小貿易や密猟にかかわっている人達がかかりいるらしい。しかしこの最後の所あたりの様子がどうもはっきりしないのである。130戸が食って行くためには相当の仕事がなければならない。ところが、それがどうもはっきりとは

見えてこないのである。ちなみにいうと、私はこの集落を漁村として紹介されて調査に入ったのだが、どう見ても漁業だけで食っているようには見えないのである。

全体は見えないのだけれども、このマレー区の中心的な人物二人の経歴を聞いた時、何となく、彼らの生活の輪郭は判ったような気がした。二人とも1910年代の生まれだが、その略歴は次の通りである。

A氏：パレンバンに生まれるが、両親と共に、すぐにこの近くに移住。12歳でシンガポールに船の雑役夫、16歳で中国人所有の船の船長になる。23歳で自分の船を持ち、スマトラ産エビをシンガポールに運ぶ。31歳、ジャカルタ・チモール航路の大型船の副船長になる。34歳、ジャカルタに古鉄回収業開業。36歳、オーストラリアに渡り、真珠採りダイバーになる。37歳、シンガポールに帰還。漁具販売。43歳、スンバクで漁業を行い同時にその漁獲物の積み出しを行う。46歳、本マレー区に到来、ココヤシ園を拓く。56歳で本村村長となる。

B氏：幼少時、この近くの河川沿いの小村でサゴ洗い。やがて、サゴのシンガポールへの輸出業。第二次大戦中、日本軍に協力、造船業を始める。終戦後、サゴ洗いに帰る。1960年代中頃、本マレー区に到来。漁業とココヤシ栽培。

二人の経歴を見ていると、すさまじい勢いで職業をかえ、かつA氏にいたっては大変な広範囲にわたる移住を繰り返している。

汀線集落の住民の全員がこの二人のような目まぐるしい流動を繰り返しているとはいわないが、汀線の住人達には多かれ少なかれこうした流動と混合が起こっていることは事実である。女性の動きは少ない。しかし、男性は転々と住み家をかえてゆく。そして、しばしばその行き先で新しい家庭を持つ。

あのマレー世界に見る混血的な形質、そして驚くばかりに広範囲にわたって均質なマレー語の分布はこういう人々の移動と混住に裏打ちされて存在しているのだろう。

海岸における「野」的風景

東南アジア海域世界においては山地多雨林にしか野はないとした。しかし、野的風景は実際には海岸にもある。そしてそれは1970年代からは着実に増え続け、本当の野へと変貌しつつある。そのことについて少し見てみたい。

伝統的な東南アジア海域世界には港は多くあったのだが、絶対的な食料不足地であった。すでに見たようにマングローブの湿地林や熱帯多雨林が農耕不適地であったからである。だから、食料は域外から運び込まれていた。例えば17～18世紀だと、食料供給地として最も重要だったのはジャワとシャムであった。ペグーからもかなり供給されていた。

しかし、マラッカ海域やスンダ海周辺でも本当に穀物生産が全く無かったかということ、そうではない。そこは冒険商人達である。この過酷な条件下でも稲作を行なった。ただ、それは普

通の水稲耕作民が行うようなものでは全くなかった。旺盛に繁る森を伐り倒して、耕起も何もしないで、そこに大苗を移植し、稲を作ったのである。何のことはない。そのやり方は焼畑の技法である。ただ、この過湿な海岸低地帯では籾を直接播種するのでは生育が思わしくない。だから、大きく育てた苗を植えたのである。植えるに際しては、焼畑民が用いるのと同じ穿孔棒を用いて孔をあけ、そこに苗を挿しこんだ。

この稲作は稲作であることは事実なのだが、普通の農民の稲作とは一つの点で明瞭な違いがあった。それは、商品としての米を作るのであったから、儲けにならないと、サッサと止めたということである。ある年、ある地方にパッと稲田が開ける。しかし、次の年に行ってみると、もう全くない。ある人は稲を作っている、その時自分は農民だと自己紹介する。しかし、2、3年経って行ってみると、その人はもうそこには居らず、家もない。船乗りになったという。こういうことが、実に頻繁に起こるのであるが、むしろこういう一時的、投機的な稲栽培が常態とあってよい。こういう自称「農民」を私はギャンブラーと知っている。海域東南アジア世界の海岸部には稲はある。しかし、それはギャンブラーの作る稲で、出現したり消失したりする。こういう耕地の広がる所を私はここで野的風景というのである。野ではない。野的なのである。

ただ、最近はこの野的風景が定着しだしてきた。本当の野になり出してきた。医薬品が手に入るようになって、海岸低地の居住がぐっとし易くなった。国策でもって、海岸低地が大規模に拓かれ、そこに集団移民が入れられるようになった。熱帯多雨林の資源が涸渇し、加えて国の監視の目が厳しくなって、ギャンブルをする場所が少なくなってきた。こういうことが重なって、海岸低地に農業空間が増え出して来たのである。これは一種の脱海域世界現象といてもよい。

第二次大戦以降、新興国が国造りを推進させる中で、脱海域世界現象はいろいろの方面で起きている。第一、中央政府の指導や集権ということ自体が、本来非海域的なものである。

お わ り に

本特集の総合タイトルには「海域世界」という言葉が現れている。この小論の中にも同じ言葉を用いた。東南アジアに対してこの言葉を与えることは大変新鮮であり、このことによって、今までには見られなかった新しい東南アジア像が生まれてくる可能性がある。

本小論ではどうていられなかったが、今後はこういう方向で研究を進めると面白かろうと思うところがあるので、最後にそれを書いて稿を閉じたい。海域世界といった場合、問題は5つぐらいありそうである。

1. 東南アジア海域世界の歴史の変容

東南アジアの海域での活動のウネリの大きさとその内容、とりわけその担い手が誰であったかを明確にすることである。おそらく、東南アジア海域世界が最も意義深く動いていたのは13世紀頃から18世紀頃までのスルタン達の時代である。この時活動の密度は極めて高くなっている。もっとも活動量という意味ではヨーロッパ列強が到来してからの方が多いに違いない。しかし、このヨーロッパ時代になると東南アジア海域は世界の海の一部にさせられてしまい、その担い手はオランダ人やイギリス人という完全な外国人になってしまっている。それは異人といわれた半在地人が、「東南アジア海域世界」を作っていた時代とは全く違うのである。このあたりの歴史的展開をはっきり示すことは一つの重要な研究テーマなのだろう。

2. 海域世界の比較研究

海域ルートというのは本来、地球規模で連続するものである。東南アジアの海域世界は西はインド洋から地中海、北海、バルト海に通じている。北では東シナ海から日本の周辺の海に通じている。こういう世界に広がった海域は、それが全体として歴史的な展開をしているものである。早くギリシャ時代から地中海は極めて活発な海域活動があったが、やがて、その中心は移動してゆく。その様を世界規模で一度概観することである。東南アジア海域世界が最も東南アジアらしく活動していた時には北海からバルト海にかけてはハンザ同盟都市の活動があった。その二つの比較、あるいはひょっとしたらあるかも知れない相互関係の研究も面白い。

3. ネットワーク性

海域世界にはそれ特有の社会の仕組みがありそうである。すでにこの小論でも議論したが、そこにある社会がもっている異国要素、混合性や流動性、そして、大きな核こそないが対人関係を基礎として隅々にまで連続して行くネットワーク。こういうものは農業地帯などで私達が常識としているものとは全く異質のものである。このネットワーク性をさらに詳細につめる作業も必要である。

4. 都市研究

ネットワークの大小の核になっているのは都市である。本小論では主として「森、野、海」といった生態基盤から見てきたが、海域世界が畢竟、交易を中心にした場であることを考える時、都市の研究は不可欠である。都市を描かずして海域世界の描写はありえない。ただ、東南アジアの場合、脱海域世界化と同時に都市の膨張が起こっているという節もある。そのことをも含めて都市の研究は早急になされるべきである。

5. 森との関係

他の海域世界に比して、東南アジア海域世界で突出した特徴の一つは、そこがつい最近まで深い森で囲まれていたということである。森は闇の空間で、魔物もいればカミもいる。東南アジア海域世界の一つの大きな特徴は、こういう魔物やカミガミがまだ濃厚にいる世界であるということである。地球的な規模で広がる海域世界の中で、特異東南アジア的なものをえぐり出そうとすると、この方面からの接近が一つの早道であり本質に迫ったものでもある。

東南アジア海域世界の研究の前途は長そうである。